

## 第六回「国際真宗学会」に参加して

樋 口 章 信

はじめに

「大乘の至極・浄土真宗」という基調テーマの下、第六回「国際真宗学会」<sup>①</sup>がここ大谷大学において開催された。二年前のカリフォルニア州立大学バークレー校における日程と同様八月三日より五日までの三日間の期間であったが、水準の高い学会であり、連日熱心な発表、質疑応答が続いた。

参加者総数は約四百名、そのなかで正登録参加者百二十名を超え、参加国数十四、そのうち発表者の国をひろってみただけでも日本、アメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ブラジル、ポーランドの七ヶ国、五十三名に及び、名実ともに真宗に関する唯一の国際学会となっている。その構成としてパネル四部、セッション十部をそ

の骨組みとし、初日の夕べにおこなわれたルイス・ゴメス・スミガン大学教授「浄土のイメージ——何が物語りを意味深くするのか——」と、本学の寺川俊昭学長「信仰のダイナミクス——廻向と願生——」のふたつの公開講演をもって今学会の基調が提唱された。講演には内外の多くの参加者が熱心に聞き入っていた。それぞれが方法的に大谷大学の真宗学を示唆する貴重な内容であった。

因みに前回の大会には大谷大学からも真宗学教員、学生のツアー十数名が参加し、「真宗学研究……この十年の回顧と展望」という基本テーマの下で研鑽を積んだことであった。そうして今回大谷大学が国際的視野を念頭に置きつつ、積極的にこの第六回大会を迎えたことは真宗学研究の国際的場にもうひとつの流れを加えたことであり、大いに意義のあることであると思う。本学からも

多くの発表参加があった。小野蓮明教授は「誓願一仏乘」

というご発表をされ、神戸和麿教授は「往生——正定聚の機(パネル)」を、三明智彰助教授は「親鸞の仏性論と

「大乘の至極」としての浄土真宗」という題で発表された。安藤文雄講師は「親鸞における業の問題」を考究され、一楽真講師は「時機相応の法」と題した論稿を読ま

れた。また大乘仏教としての浄土教という見地からはロジャー・コーレス氏(デューク大学)の後に小谷信千代

助教授が「チベット仏教における浄土信仰」を論じられたし、また『維摩経』に関連しては金沢大学の橋本芳契

名譽教授と織田顕祐講師が発表なされた。同朋大学からは終末医療との関連に基づき田代俊孝助教授が「真宗と

デス・エデュケーション」という題でご発表をされた。大谷派教学研究所から西田真因師が『歎異抄』における

罪の問題」を説明され、大谷派の北米開教区からは今井亮徳師(かわりめ)とパトリシア・ホンダ氏(清沢の精

神主義における禪)のお二人が参加された。

全体にわたりこの誌面を借りて具体的にその意味と課題を綴ってみたいが、紙数の余裕がないのでパネル中心

のプログラムについて略述させていただきます。① プログラムレジュメ、論文集が出されているので詳細については特

に要旨集をご参照いただきたい。

### パネル討議のそれぞれ

(a) パネル1(往生——現代における救いの問題)

第一パネルは本学の長崎教授の司会の下、徳永道雄氏

(京都女子大学)、「大乘の真理としての還相」、ジョン・ロス・カーター氏(コルゲート大学(人間の純粹な行為としての「帰依」もしくは「帰命」について)、佐藤正

英氏(東京大学)、「往生の背景」、神戸和麿氏(大谷大学)、「往生——正定聚の機」の各氏がペーパーを読まれ、

その後熱心な討論がおこなわれた。このパネルは「往生」を臨終にみるような二元的平面的往生観の再吟味をうながすものであった。それは神戸教授のいわれるように

「即得往生、住不退転(至心信業願成就文)」を根拠としなければならぬし、また佐藤教授によれば、このキーワードは現代日本の思想的課題とそのまますりあわせる

のではなく、親鸞の生きていた時代の文脈のなかで考察されなければならないのである。私に思うに、現代の人間にとって「往生」という言葉はもはや「肉体的死」と

同義になっっているのではなからうか。本来それは精神的誕生を意味しているはずである。しかし、その言葉が死

を連想させるということは、けっして外側にむかって批判されるべきことでなく、自己批判的内容をそのまま要求していることであろう。商業化し、いのちを置き忘れる傾向にある儀礼中心主義の現況を物語るものでもある、と私は受け取るのである。

私にとって課題は次のように感じられた。つまり「往生」観を問うということは親鸞教学として内面的に突破すべきものであると同時に、「儀礼」の意味を再考し、それを客観化し、さらに社会学、民族(俗)学、神話学、文化人類学といった諸学の成果を踏えて再解釈することではないかと。それはけっしていわゆるモダニズムの衣装を身に着けた現状主義ではなく、自己内部の伝統的、文化的、習俗的なるものの内容をできるだけ正確に把握してその積極面と消極面を理解し、そしてそれとは次元が異なる個の信という問題も考察し整理した上で、両者の本来あるべき関係に及ぶことであろう。

(b) パネル2 (対話上の諸問題——多元世界と浄土真宗)

本学の多田稔教授司会によって熱のこもったパネルが進行していった。デニス・ギョラ氏(パリ・カトリック

研究所/「純粋な対話のための基本的姿勢」)、ジェームズ・ハイジック氏(南山宗教研研究所/「禁欲主義に抗して——対話から行動へ」)、グスタフ・ピント氏(カンディド・メンデス大学/「真宗とビジネス」)そして最後にアルフレッド・ブルーム氏(IBSバークレー仏教学研究研究所)が「浄土真宗の究極性——親鸞の天台に対する応答」という論文を読まれた。

ハイジック氏に多くの質問がフロアーから集まっていた。氏はヤン・ファン・ブラフト氏を継ぐ貴重な仕事をなされつつある方で、『懺悔道の哲学』を著し「三願転入」「三心釈」「還相廻向」に哲学的分析を下した人、田辺元についての氏の論文並びに翻訳が最近話題を呼んでいる。むしろ私はパネル3において氏の翻訳論を拝聴したかった気もする。読まれた論文タイトルは、「感覚の回復——時代の禁欲主義に抗して」というものであった。

氏はいくつかの大乗典籍におさまる一説話を以て始める。ある男が二頭の象に追いかけられ、井戸に入っている危険から身を守ろうとする。井戸に絡まっている葡萄の蔓につかまっていると、白と黒の鼠二匹がその蔓をかじっているのが見える。下を見ると毒蛇が下から這い上ってくるのではないか。底には火を吐く龍もいる。絶体絶

命。上をよくみると甘い蜜が数滴蔓をつたわって落ちてくるのがわかった。一呼吸おいてその蜜の匂いを味わってみる。すると、その瞬間彼はすべての恐怖から解放されたのだった。とこういう話である。これ以外にも『仏所行讚』、『本生経』、またゴットフリート・フォン・シュトラスブルクによる中世の『トリスタンとイゾルデ』を引用され、縦横に東西の宗教的隠喩を涉猟されるのである。また聖体拝領における本来の感覚の回復を氏は説かれる。東西いずれの伝統によったとしても、恵みと洞察力の自然な流れは慈悲や愛を呼び起こし、日常的因習の殻に閉じ込められた本来の感覚を再び呼び覚ますのである。さらに氏は、現代産業社会を痛烈に批判し、地球環境保護運動の理論的支柱ともなっているシュマッハーやイヴァン・イリイチを引き合いに出し、隠喩にあらわれた消費・管理社会的性格を告発される。消費という現代人の習性は集合的自己抑制と等しく、東西の最も過剰な禁欲的伝統と肩を並べるほどであるというのである。これらの指摘は今回の学会でも異色のものではあろう。氏の発表は大いに思想的意義があるといえるのではないだろうか。

アルフレッド・ブルーム博士の報告は基調主題「大乗

の至極・浄土真宗」に肉薄する展開であった。氏は「天台に対する親鸞の応答」というテーマで、親鸞は浄土教を「再解釈」したのであり、阿弥陀仏とはいわば宇宙的・普遍的真理としての存在であるとするのである。本来天台の本覚思想にもとづく「久遠実成」という考え方が「久遠実成の阿弥陀仏」と質的变化を遂げてゆくこと、「大聖世尊世に出興したまふ大事の因縁」という言葉の「妙法蓮華経」との関連性、新しい菩提心解釈としての「信心仏性」の思想など、伝統的顕密体制の下にある思想的信仰的枠組が揚棄されたのであるとする。けっして直接的に天台ならびに当時の伝統的流れに対抗しようとしたわけではなく、すべてを包み込む選びの道を親鸞は定式化したと力説されたのであった。氏は敢えて今回は近・現代の欧米思想あるいはキリスト教の背景をもった言葉を使用することなしに、質的にすぐれて現代的、普遍的思想を展開されたといえるのではなからうか。すくなくとも私にはそのように思われた。曾我量深師がそうであったように、教学の歴史的、伝統的遺産にいったん帰入し、そこに活きる言葉の内面的密度を体験的に高め、その本来の意味を、感覚的、かつ正確な言葉で提示するということは希有なことなのである。感覚＝意味として

の sense はハイジック氏とおなじようにブルーム氏にとっても鍵概念である。

デニス・ギーラ氏は宗教的対話において要求される基本的姿勢を「尊敬」「謙讓」「誠実」の三徳目に置かれ、これらいずれかの要素が欠落するならば真の対話の成立がむずかしいことを主張された。まことに傾聴にあたいする指摘である。

グスタフ・ピント氏は経済活動、職業倫理の側面からアプローチされ、激変する世界のなかでその視点をどのように設定すべきか語られた。阿弥陀仏を博物館に飾ってあるがごとき文化財的存在に変質させてしまわないためにも、私達はいまこの時代の間における諸問題を真宗にてらして考えなければならぬのであり、その意味で職業の内包するものを吟味し直すことが課題であるといわれる。それは仕事が「たまわりもの」であるという視点であり、自分の選んだ仕事は「天職」すなわち mission であるという考え方である。具体的にビジネスという言葉タイトルにまで選んで発表されたことにその意義があると思うのであるが、何事も抽象的思弁に陥りがちな傾向を訓戒するものと聞いた。もちろん学問は抽象的思索がなければ全きものにはならない。しかし

具体的関心をもって出発するものである。いつしかその具体性も輝きをうしない、無軌道に流転しがちな思弁性への危機に氏は鋭角的批判を与えられたのではなからうか。

フロアーを含めた質疑応答のなかで、仏教とキリスト教の出会いは大きな意味をもった出来事であるが、自己の「真実」のなかに他者をのみこんではならないこと、キリスト教のもつアブラハムの伝統の問題性やイスラムとの関係をも含めて、キリスト教神学者にも参加していただいた上で論議をすすめてはどうかなどという重要な意見交換がなされ、興味深いものであった。今後の課題を指し示すもののひとつであろう。

(c) パネル3(言葉と解釈——聖典の翻訳をめぐって) パネル3にはとりわけ関心をもった。司会レスリー・カウムラ氏(カルガリー大学)、コメンテーターにルイス・ゴメス氏(ミシガン大学)があたられた。ポール・スワンソン氏(南山宗文化研究所/「常行三昧と『般舟三昧経』——『摩訶止観』の英訳をめぐって』)、ノーマン・ワデル氏(大谷大学/「翻訳にあたっての覚書」)、トマス・カズーリス氏(オハイオ州立大学/「如是我読——親

鸞を翻訳するにあたっての哲学的考察)、デニス・ヒロタ氏(本願寺国際センター)／「親鸞浄土教における言語観——信心と解釈」の四氏が発表された。ここにおいても今回の大会の特色のひとつとしてフロアーからの応答の多さには眼を見張るものがあった。

スワンソン氏は法華三大部のひとつ『摩訶止観』のなかで説かれる四種三昧のひとつ常行三昧について、その出典『般若三昧経』と『十住毘婆沙論』を引かれながら翻訳についての問題点を示された。個々の言葉のニュアンスの異なり、その言葉にもちこまれる文化的背景、伝えられるべき対告衆によっておこる意味の変化などを勘案すると、厳密で字義的に忠実な訳によって、特に古典的聖典の場合、どこまで原典の内容を再現しうるかという問題を提起されたわけである。出典引用箇所とその内容に通暁していないとそのものがわからないということがあるという。とくに比喩的表現の場合その度合が高くなる。またある部分を引用する場合、それはある点だけを強調するためなのか、それとも換喩的な意味での強調なのか。単に暗示するための引用もあり、オリジナルな文脈を把握することが困難なことが多い。このようなことからすると、辞書的な語義に忠実な翻訳というも

のは、最悪の場合意味も文脈も喪失した言葉の羅列に終ってしまふことがあると語られる。氏は翻訳における陥穽を指摘され、その専門的かつ具体的例示により聴衆の関心を喚起した。思うに信仰を伝達する媒体となるべき聖典を他言語に置換するということは、それ自身が実は翻訳者本人の信仰的知恵と教理的理解、さらに伝えようとする情熱なしにはありえないことであり、なによりも愛と慈悲と懺悔の行為なのであろう。宗教とはなにか、ということをもう一度原点から問い直すことが必要であると思つた。

ノーマン・ワデル氏は『正法眼蔵』の英訳者としてすでにアメリカにおいて高名を馳せている方である。この度のパネルで氏はその機知にあふれた語り口で聴衆を引き込んだ。その一部を思い起こすと、たとえば西洋では翻訳者は「裏切り者」としてイスカリオテのユダやブルータスと同じ地位に置かれてきたとされる。どうあろうとも翻訳者は翻訳をやめなかつた。ゲートは次のようにカーライルに語つたという。「たとえだれがその不十分さを指摘しようと、翻訳はこの世界のできごと全体の中で最も重要で最も価値のある関心事のひとつなのである。もしその翻訳ということがありえないならば、われ

われはおし黙った壁に仕切られた尊大な教会区のなかに生きることとなるう。」。確かに翻訳の限界を指摘して、古典を少数者にしか近付けないものにするよりは、積極的に形を残していく方がどれだけ生産的だろうか。なによりも翻訳者自身がその限界性に気づいているということがある。翻訳実践者として氏はその困難さについて次のような点を挙げる。まずテキストそのものにおける理解の困難さである。それは漢語、和語のもつさまざまな桎梏によるところが大きい。なにしろアジアの地にイエス・キリストの福音の書が根付くのを妨げた言語文化である。そして『正法眼蔵』そのものもつ困難もある。道元の深遠で複雑な文を翻訳できる形にまでもってゆかねばならない。まずはテキストや注釈書の類をくまなく読み込む。しかしなかなか納得がゆかない。やがて翻訳者はある結論にいたる。このテキストは世界で最も魅力ある書のひとつであると同時に、最も手に負えないもののひとつでもあると。『正法眼蔵』の英訳に関しては「正確さ」こそ重要課題であるとされる。字義に忠実でない意識的パラフレーズは道元がなぜその漢字を使用したのかを語らず、そのオリジナルなイメージを喪失してしまうのである。とりわけ「有時」ならびに「仏性」とい

うような思想的中核をなす章ではそうあらなければならぬ。どうしても字義的な訳では解決のつかないときこそ他の方法によるべきである。とこのように実践的かつ具体的翻訳論を展開されたのであった。

考えさせられたのは「テキスト」とはいったい何かということであった。ここでは聖典の翻訳となっている以上、聖典とは何かについて明確な規定を立てなければならぬ。聖なるテキストとは何なのだろうか。聖とは何か、またそもそもテキストとは何か、出発点に立ってそれぞれあきらかにする必要がある。

トマス・カズーリス氏はまずテキストの概念を組変えた哲学者ジャック・デリダ<sup>⑬</sup>の言葉、「翻訳とは変形である。」を引かれ、その人の「意図」によって文脈がでるがるということを指摘される。文脈のなかに言葉が存在するのであり、その逆ではない。字義どおりの訳では本来の文脈が逃げてしまうことがある。まして『頭浄土真実教行証文類(教行信証)』というテキストとなると長い間にわたって草稿に何度も手が入れられている。またそのときどきの意図や予想する読み手が同じとは限らない。畢竟、翻訳者はいわゆる翻訳をするのではなく、彼自身の読みを言葉に換えることとなる。また翻訳者は現代の

読み手の文脈と当時のそれとがほぼ同じであろうと推測する。原典の意図と翻訳者の読み、さらにできあがった翻訳テキストとその読み手との関係によってひとつの翻訳は二重・三重の構造になっているのである。ガーダマー<sup>⑪</sup>の解釈によれば、テキストを読むということはそれを著した人と対話するということである。このことを確認しなければならぬとカズーリス氏はいうのである。そして氏は一世紀前の哲学者フレーゲ<sup>⑫</sup>を引用して、言及性 (Bedeutung-reference) と意味 (Sinn-sense) との関係に及び、さらにフッサール<sup>⑬</sup>を援用して「意見・意図・目的・信念」などを意味する *Meinung* としての「意味」を提起され、その人がその言述によって何をしようとしているのかを把握することが肝要であると説かれる。そこにジョン・オースティン<sup>⑭</sup>やジョン・サールの行為としての発話 (speech act) の理論の重要性を見る。具体的に「愚禿」という言葉の翻訳における例を挙げて氏は適切な翻訳とは何かを示される。その背景にある廻向の思想を考慮せずにこの語の翻訳はありえない。また『教行信証』を執筆するとき親鸞はサンスクリット語を考慮に入れていたわけではない。ここでサンスクリット語は親鸞の文脈には関係していない。むしろ親鸞独自の訓みによって

引用原典の内容をゆたかに変換させたのである。さらにいうならば、学問的な翻訳態度はテキスト自体のもつ「変容力 (transformative power)」を弱めてしまうかもしれない。その変容力に感動することなくして、どうして解釈・翻訳することができよう。翻訳とはテキストからその精神的力を「ぬすみとる」ことである。信仰がなくして翻訳はありえない。信仰への姿勢がなければまさに「はからい」である。「如是」という言葉に注目すべきである。カズーリス氏はこのように力強く問題提起された。フロアーの永富博士との緊張感に満ちたやりとりがこの指摘の大きさを物語っている。さきほどの、サンスクリット語は親鸞の意図を我々が解読する際に関わらないという問題に対してであったが、逆にいかにカズーリス氏の提起が大きな意味をもっていたかということでもあろう。大変興味深いパネルのひとこまであった。カズーリス教授は過去数十年間のヨーロッパにおける宗教的テキストの翻訳に関する解釈学的探究の伝統に沿いつつ、またその限界性をも考慮しながら親鸞の場合に踏み込まれた。ありがたいことであるとおもうのである。真宗学においてテキストとは何かということについての一解釈が西洋の光りをおして了解される可能性がひらいてい



る。今後より詳細なご研究をいただいて氏の方法に学びたいと思ったことである。

現代の親鸞翻訳者の第一人者デニス・ヒロタ氏は「親鸞の言語観・信仰についての仏教的解釈学」というペーパーを読まれ、親鸞の人間理解を、そのテキストを具体的に解釈しながら論じられた。「信巻」の「三心一心の問答」の翻訳にあたりその文脈における「心」という言葉のもつ多義性 (polysemy) についての指摘は関心のあるところである。仏心と衆生心が敢えて分かれるところがあり、微妙な翻訳がなされるところである。英訳をとおしてみることによって逆に根本問題に触れることがあるのである。

付言すべきはルイス・ゴメス氏の創造的、刺激的論評である。各発表者への適切な熱いコメントはいうまでもないことがあるが、氏の一問題提起に触れておきたい。それはこのパネルのテーマに使われた「解釈」という言葉が hermeneutic なのか hermeneutics (解釈学) なのかという問いかけである。方法と方法論が異なるように解釈と解釈学はまったく意味が違ってくる。ここでは解釈学であるという意味限定が必要かもしれない。

(e) パネル 4 (精神主義の意義——近代における浄土真宗の表現)

ここは大谷大学の学祖清沢満之についてのパネルである。司会は安富信哉教授、コメントーターに寺川俊昭教授 (学長)、そして四人の発表者はそれぞれ羽田信生氏 (沼田仏教翻訳研究センター) / 「救済者」から「求道者」へ——暁鳥徹の「アミダ仏」観の変遷)、ギルバート・ジョンストン氏 (エッカード大学 / 「主体性——精神主義の強さと弱さ)、加藤智見氏 (東京工芸大学 / 「精神主義の近代性と現代性」、マイケル・バイ氏 (ランカスター大学 / 「精神主義の広やかな意味」という順であった。清沢満之研究が再びあらたなる多様な見地からなされる兆しが感じられる今、求道性、主体性、近・現代性、そして精神性といった面から、それも世界思想的視点からとりあげられたのであった。この四特徴を結合しただけでも清沢師のイメージがあざやかに蘇ってくるのである。「精神性(に満ちた)近・現代の主体的求道者」というように。

ここでは羽田氏のご発表に触れようと思うが、氏は仏祖から連続して窮まることのない精神主義の命流を暁鳥徹にみる。恩師清沢没後に陥った恩寵主義をのりこえた

ことよって暁鳥敏の「アミダ仏」観も「救済者」から

「求道者」へと変遷していったことが論証された。客観的実在としての「アミダ仏」から主体的事実としてのそれに変わっていったのである。親鸞その人が力強い求道者 (dynamic seeker) であったのであり、暁鳥敏はそのことを身証した人である。「安心主義 (e-pose-ism)」では決して親鸞の生涯とその実像がつかみきれない。「アミダ仏」を対象的に眺めてその救済にすがらるような二元的な宗教観は信仰の危機として根本的に克服されなければならなかった。白河党時代にいわゆるその門下三羽鳥のなかにはひととき清沢の信を疑ったものがあつた。暁鳥敏がそのひとりである。しかし実際に「活きた」精神の伝統は清沢のなかに動いていたのである。真宗教学近代化つまり明治以前の伝統にしばらく教義の殻を破り、そこにあたりし力吹き込むということは危機克服後の暁鳥によつて継続的になされていった。このことは私も漠然とわかつてはいたのである。しかし羽田博士の胸を打つ指摘によつて始めて心底にリアリティーをもつて入ってきたのである。

以上、パネラーの発表を一瞥しその意義についてわずかばかり述べさせていただいた。卑見によつて実像をゆ

がめたのではと危惧している。

さいごに

各セッションの水準の高い発表成果に関して報告する余裕をもたなかった。ご寛恕を請う次第である。第一セッションC「浄土真宗と現代的課題」と平行開催であつたので聞くことはできなかったのであるが、セッション3「仏教とキリスト教における欲望と慈悲」はジェームス・フレデリック氏 (ロヨラ・メリーマウント大学)、ウソノ・タイテツ氏 (スミス大学)、ファン・ブラフト氏 (南山宗教文化研究所)、武田龍精氏 (龍谷大学) の方々によるパネル形式の発表により白熱した議論を呼んだという。『Jodo Shinshu』の著作でしられるジェームス・ドビンズ氏は真宗モダニズムという言葉を提出され、歴史的方法によらずに現代的発想のみで親鸞の実像を考察することの問題性を指摘された。すばらしい同時通訳能力で会場を湧かせたマーク・ウンノ氏 (スタンフォード大学) のセッション発表 (親鸞を読むことにおけるジャンルの問題) は親鸞の諸著作の性格と表現様態を「愚禿釈親鸞」という立場から再吟味するものであつたし、はるかブラジルからみえたヒカルド・M・ゴンサルベス氏

(サンパウロ大学)は現代フランスの宗教思想家ルネ・ゲノンの宗教解釈を紹介され、浄土真宗の末法思想とそれとの共通点を述べられつつ、近・現代における安易な科学的発展主義やオカルト性、迷信性を批判された。パークレーIBSのケン・タナカ氏は真宗が世界と関わる根拠を「常行大悲」にもとめられて論を進められた。

セッション全体を眺めると現代社会のなかで真宗がどのようなはたらきをなしてゆくのかという問題が浮上する。積極的生活原理としての真宗学が多く参加者の関心である。国際学会の動機が傾向的に明快であると思う。

もうひとつはパネル2で問題になったように、宗教的多元主義<sup>①</sup>である。宗教相対主義として傷みのともなわぬい宗教観に転化する危険を含むが、少なくとも原理主義的宗教観をいま世界は脱却する方向にあるのであろう。日本人の精神生活が異文化を意識し、自らを客観化することによって多元的な世界観をもちはじめたということでもある。もともと大乘仏教の根本原則のひとつである「因縁生起」の法則からいって「関係性」を抜きにした議論は仏教ではない。そうは言っても、私における世界認識が徹底してその原理に従っているかと吟味してみると、意外に「わたくし」の慣れ親しんだ文化内部でしか

展開していない場合が多い。実際国外から眺めてみると、そのことがよくわかるものである。文化・伝統に生き、そしてその限界を主体的に克服する。さらに与えられているその自己克服力(信仰)によって同時に存在している多元的社会と心の通いあうコミュニケーションを成立させていくということは、まさにこの危機をはらむ国際関係における最重要課題であり、伝統を昇華した近代真宗学の応用によって国際社会との対話・交流もさらに実のあるものになるであろう。

この度のテーマ「大乘の至極・浄土真宗」は『末灯鈔』を出典とするが、それは『教行信証』総序のあとの標榜の文すなわち「大無量寿経浄土真宗」と同じ謂であろう。親鸞の師法然の著した「選択本願念仏集」を「師教の恩厚を仰(後序)」ぎつつ注釈したともいえるその『教行信証』はまさに「選択(せんちやく)本願」の書である。人間からみればその選択とは主体的大乘精神世界への帰入であり、そのこと自体が本願力廻向のはたらきである。内外の多様な世界とこのただいまにおいて邂逅しているという事実の意味するところは、「大乘の至極・浄土真宗」としての「えらび」が、多元的な意味文脈をもった世界との遭遇とまったく矛盾せず、否それどころか、源

流の異なるそれら諸々の意味世界は、あたかも諸河川が大海に注ぎ込まれるように、本願力を本体とした意味世界に統一されていくことなのである。『教行信証』「真仏土巻」の結釈において報土を説明するところで「それ報を案ずれば、如来の願海によりて果成の土を酬報せり」と親鸞が述べているようにすべてはそのように与えられている。

貴重な議論が関心ある人の眼に触れるように、いくつかのパネルの出版が心待ちにされる。必要なものはあるいは翻訳されるべきだし、またそれはたまたま参加できなかった人やその他の分野の方々にとっても意味あるものとなる。

感動を呼んだのは学会会長永富正俊博士（ハーバード大学）による閉会式におけるスピーチであった。永富博士が学会長としての務めをこの度で終えられ、稲垣久雄博士（龍谷大学）に譲られることになった。そのことが報告された後でスピーチがおこなわれた。教授は第六回大会の成功にたいして慈愛に満ちた祝福の言葉を送られ、今後の国際真宗学会の発展にむけての大きい期待の念をお示しになった。会場は惜しみなく感謝の拍手を送った。

それにつけても思うことは内外の真宗学者が一堂に会して発表し、議論し、交歓し、そして再会を誓い合うということの意義である。それはいくら強調してもしすぎることはない。二日目の夕べ、あの心に深く焼きつけられた交歓会の光景こそ実は「国際真宗学会」のハイライトシーンであった。参加者一同ならびに関係教職員、また学生協力員にいたるまでみな一様にその出会いをよろこびあった。

大会が終ってから四カ月、まだ全体の整理ができてはいないが次の点を再度強調して脱稿する。いま私達は自由・平等・（敬）愛といった、必ずしも西欧的伝統によらない「人間的諸課題」を、むしろ諸外国に触発されることによって「外発的に」問われている。国内生産物の国外のそれらとの自由競争、そのより具体的展開としての日本の自然と農業を破壊させかねないコメの輸入自由化問題、国内外国人労働者の現状、PKOの実態、人権問題、環境問題など、政治・経済・社会・教育のすみずみにわたり国際関係論的・普遍人間論的に考察しなければならぬことが山積する。いま人間を成就させるべき真宗がそれらに無関心であることは教法原理的に不可能である。何故か、「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」の認識をも

つ者にとって、「弥陀如来は如より来生して、報・応・化種々のみ(身)を示現したまふ」<sup>②</sup>からである。真の宗教は如来であり本願である。その世界(本願海)では外発性も「廻向」として内面化、課題化され、称名念仏者・内観者の道として堂々とありのままに世界内関係存在として分限を尽くすことが宣言される。これは社会意識から埋没した個人意識への退行ではない。社会から個人を問うのではなく、個人が教法によって成熟し、そして独立して社会に巣立ってゆくのである。そのプロセスを聞思という。教法がかならずしも文字のなかにあるとはかぎらないのである。だからこそ異文化圏、異文明圏と対話し、個としても信仰共同体としても国際社会と共に歩むべきである。仏教・浄土真宗は、地域共同体の文化・生活から想像可能な個人・社会集合体としての人類文明に貢献するであろう。そしてその仏教・浄土真宗に関心をもつ世界中の人々が意見発表・対話交流をおこなう場として、ますます「国際真宗学会」の存在が重要性を帯びていくことであろう。

#### 註記

- ① Society for Buddhist-Christian Studies の Newsletter (no. 12, Fall, 1993) に今回の大会に関する簡単な報告がある。
- ② この参加報告は真宗総合研究所国際仏教研究班チームの多田稔教授によってなされている。『研究所報』no. 27(一九九二年三月)参照。また『Pure Land 誌』に於いて Ruth Tabra 女史によって報告(The Pure Land, nos. 8-9, Dec. 1992) されている。
- ③ この誌上では学会に参加された方々の呼称を時に応じて「氏」「教授」あるいは「博士」とした。パネルのなかの呼称は主として「氏」を用いた。
- ④ 数年前カリフォルニア大学出版局から出された“*Philosophy as Melanotics* (『懺悔道としての哲学』の英訳)”は、一九六五年にユネスコ国連教育科学文化機関などの援助を受けて、武内義範博士が Whitehead の“*Process and Reality* (『過程と実在』)”を翻訳された山本誠作氏に英訳を託し、八割がた訳されたその草稿に、すでに西田幾多郎の『善の研究』を英訳していた Valdo Vigieliemo 氏と共に手を入れたものであった。後に Jan Van Braeg 氏や Bucknell 大学の Gerald Cooke 氏に関わられ一部第四章だけはすべて出版された(*Japanese Religions*, V, no. 2, pp. 29-47; VII, no. 2, pp. 50-75)。最終的に Heisig 氏が全体のさらなる翻訳・訳語の統一・整文等の仕事を引き受けられたのである。また同氏は Taitetsu Unno 氏と共に Berkeley の Asian Humanities Press より一九九〇

年に内外の研究者多数による論文集『The Religious Philosophy of Tanabe Hajime』を編集・出版された。

- ⑤ 『翻訳名義集』(大正大蔵経・五四・一一四一〇)の見えを語った。

- ⑥ Gottfried von Straburg (1170?-1210?)。中世三大叙事詩人の一人。宮廷詩人。Tristan und Isoldeは中世宮廷文学の頂点。

- ⑦ E. F. Schumacher (1911-1977)。ドイツ生まれ。戦後イギリスに帰化する。Small is Beautifulという著作で知られている。「中間技術」という概念を導入し、近代西欧の「巨大主義」「物質主義」に反対する。

- ⑧ Ivan Illich (1926-)。一九五一年からカトリック聖職者としてニューヨーク移民社会で働くが六〇年解職。一九六二―七六年までメキシコで活動。「脱学校化・脱病院化・創造的失業」などの思想で知られる。

- ⑨ 金子大栄編『真宗聖典』(京都・法蔵館・昭和三五年初版。昭和三八年一月第二刷参照)上、五二八―五二九頁。「諸経意」によつた弥陀和讃九首の二首目である。「久遠寶成阿彌陀佛 五濁の凡愚をあはれみて 釋迦牟尼佛と しめしてぞ 迦耶城には應現する」とある。因みに第八首目は「信心よるこぼそのひとを 如來とひとしとときたまふ 大信心は佛性なり 佛性すなはち如來なり」。

- ⑩ 金子大栄編『真宗聖典』上、四七二頁。『浄土文類聚鈔』のむすびの文の一部を Bloom 氏は引用されている。

- ⑪ 近年倫理、それも職業的倫理という文脈で迫る論文が見られる。Gordon & Gregory Fung 氏は前回大会同様医師

としての立場から、現代アメリカ市民の具体的生活現場にどのようななかたちで真宗が応用されるのかを考察されてる (Adapting Jodo-Shinshu Teaching for the West: An Approach Based on the American Work Ethic)。

日本においても現実の社会生活のなかで具体的に見る事が可能な親鸞思想の了解と応用が、市民生活者のなかにおいてつよく要求されるようになっていく。

- ⑫ ハブライ語で多くの人の父を意味する。イスラエルの先祖である。その信仰を神に試されて息子イサクを殺そうとする『創世紀』の話は有名である。

- ⑬ Jacques Derrida (1930-)。フランスの哲学者。言語・文学・精神分析・絵画など広い立場で西欧的知の枠組を「脱構築」しようとしている。Ecriture (書かれたもの)とこの概念を提出、記号成立の恣意性と Significant (能記・音のイメージ)聴覚映像)間の差異性の優位を強調し、西欧的表意文字中心主義を批判する。L'écriture et la différence (Paris, Seuil, 1967), DE LA GRAMMATOLOGIE (Paris, Minuit, 1967), La dissemination (Paris, Seuil, 1972) など著作は多い。

- ⑭ Hans-Georg Gadamer (1900-)。Heidegger の弟子。一九六〇年 Truth and Method (tr.) を著した。この本はアメリカにおいて人文系の学生多くに読まれている。フランクフルト学派の J. Habermas と解釈学論争があった。

- ⑮ Gottlob Frege (1848-1925)。ドイツの人。数学・論理学者。Sinn の意味は主体にたいして対

象が与えられるその在り方、把握のされ方である。Husserl に影響を与えたといふ。

- ⑩ Edmund Husserl (1859-1938)。ドイツの哲学者。現象学の祖。Heidegger, Sartre, Merleau-Ponty に強い影響を及ぼす。

- ⑪ John Langshaw Austin (1911-60)。イギリスの論理学者。言語哲学者。日常言語学派として言語活動を分析、整理した。著書に *Sense and Sensibilia* (Oxford University Press, 1962) がある。

- ⑫ John R. Searle (1932-)。Austin の理論を継いで発展させた。著書 *Speech Acts—An Essay in the Philosophy of Language* (Oxford U. P. 1971) などの著書がある。

- ⑬ 多元主義とは pluralism の訳であり、哲学的には「二つある」は二つ以上の究極的実在が存在する」と (Webster's

3rd New World Dic.) であるが、ここでは次の意味である。すなわち「多種多様な民族的、人種的、宗教的、あるいは社会構成員がそのなかで自立的な関わりを保ち、共通の文明に閉じ込められていても、自らの伝統的文化や特有な利益の発展を維持できる状態ないしは状況 (ibid.)」のことである。国家論、主権論としての多元主義が第一次大戦後にイギリス・アメリカでよく唱えられたことがある。現代の宗教多元主義については Alfred Schütz の弟子で宗教社会学者の Peter L. Berger *The Heretical Imperative* (邦訳『異端の時代』一九八六年、東京・新曜社) のなかでわかりやすく触れられている。

- ⑭ 金子大栄編『真宗聖典』上巻三四九頁。

- ⑮ 同上。

- ⑯ 同上。